

○ 病害虫防除法（サトイモ）

（ア）疫 病 *Phytophthora colocasiae*

（防除のねらい）

高温性の疫病で夏季に雨が多いと発病しやすい。病原細菌は被害組織で生き残り伝染源となる。耕種的防除法に重点を置き、誘発要因を抑えるようにする。

（耕種的防除法）

- （１）連作を避ける。
- （２）排水を良くする。
- （３）病葉は早目に処分する。
- （４）密植を避け、窒素肥料の過多を避ける。

（イ）乾腐病 *Fusarium solani f.sp.radicicola*, *Fusarium oxysporum*

（防除のねらい）

土壌および種いもによって伝染する。罹病いもの残渣とともに土中に残り、土壌中の残存期間はかなり長くと推定される。種いもとして親いもを使用すると伝染の危険性が最も高く、子いも、孫いも、ひ孫いもと低くなる。健全種いもを使用し、連作を避け、ほ場の菌密度を低く抑える。

（耕種的防除法）

- （１）健全種いもを使用する。
- （２）残渣はできるだけ取り除き、処分する。
- （３）輪作する際には休閑期間をできるだけ長く確保する。

（ウ）黒斑病 *Ceratocystis* sp.

（防除のねらい）

主に種いもが伝染源となり、土壌伝染性の疑いもある。菌の発育適温は20～30℃で夏季収穫で発病が目立つので、夏季の出荷は低温輸送にするのが望ましい。

（耕種的防除法）

- （１）無病種いもを選び、発病地から採種しない。
- （２）発病罹芽床の土を翌年使用しない。
- （３）掘り取り時に傷をつけない。

（エ）白絹病 *Sclerotium rolfsii*

（防除のねらい）

菌核が土中に残って伝染源となる。多犯性であるが、イネ科に寄生しにくいので、寄生範囲を考慮した輪作や罹病植物の処分など総合的な対策を講じる。

（耕種的防除法）

- （１）発生畑では３年程度、イネ科作物を栽培する。
- （２）被害株、被害いもは早期に除去する。
- （３）貯蔵管理を適切にする。

（オ）軟腐病 *Erwinia carotovora* subsp. *carotovora*

（防除のねらい）

土壌伝染が主で種いもでも伝染する。土壌の多湿が本病の発生を助長するので健全種いもの使用や耕種的防除に重点を置く。

（耕種的防除法）

- （１）過度の灌水は避ける。
- （２）裸地栽培では土寄せの際、葉柄に傷をつけないようにする。
- （３）窒素過多を避ける。

(カ) 汚斑病 *Cladosporium colocasiae*

(防除のねらい)

病原菌は罹病植物について越冬し、伝染源となる。第3葉以下の下葉に発生が多く、頂葉の発生は稀である。発病しても減収はさほどないので、耕種的防除を重点に置く。

(耕種的防除法)

- (1) 発病の多いところでは大吉や赤芽などの抵抗性品種を栽培する。
- (2) 堆きゅう肥を十分施し、追肥も十分行い肥料切れさせないようにする。

(キ) モザイク病 CMV, DMV

(防除のねらい)

アブラムシによって伝染するキュウリモザイクウイルス(CMV)と種いも伝染するサトイモモザイクウイルス(DMV)がある。アブラムシ防除と種いも対策に重点を置く。

(耕種的防除法)

- (1) 関連保毒雑草および栽培植物の処分を広範囲に行う。
- (2) 種いもの更新を行う。

(ク) ワタアブラムシ

(防除のねらい)

モザイク病を媒介する。6～9月に成虫が現れ、葉裏、新芽等に群生して加害するので多発しないうちに防除する。

(ケ) ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

幼虫は8～9月にかけて発生が多い。若齢幼虫期は集団で食害するので、分散前までに防除すると効果的である。近くにダイズがあると相互に発生が多くなりやすい。

(コ) イッポンセスジスズメ

(防除のねらい)

本虫のほかセスジスズメ、コスズメもいるが、イッポンセスジスズメの被害が主である。8～9月のいも肥大期での新葉被害は収量に影響する。

(サ) ネグサレセンチュウ

(防除のねらい)

連作するほど発生が多くなり、連作障害の主要因とされる。種いもにも寄生しているので、健全な種いもを選び、土壌消毒をして植え付ける。

(耕種的防除法)

ラッカセイとの輪作をする。